

「3.5壮年部結成記念日」

1枚目 / 広布の“黄金柱”壮年部 (5枚目の絵の裏に貼る)

壮年部の「壮」の字には、「強い」「大きい」との意味があります。それは、「勇ましさ」の象徴です。一家の柱、社会の柱として活躍する壮年部の友に、池田先生は「壮年部は広布の黄金柱である」との大きな期待を寄せられています。

2枚目 / 「壮年部」の結成への思い (1枚目の絵の裏に貼る)

池田先生が創価学会第3代会長に就任されて6年目の1966年、池田先生は壮年部の設置を発表されました。当時は、最高幹部の人事、理事長の交代、総務制の設置など、学会の様々な体制が新出発を迎えている時でした。

池田先生は、壮年部結成への思いを後にこう綴られています。

「壮年部が健在であってこそ、婦人部も、男女青年部も、安心して戦える。大切な、大切な学会家族を護り抜く黄金柱よ、威風堂々たれ！これが、自ら壮年として指揮を執られた牧口、戸田両先生の願いであったとあってよい。この心を実現するため、私は壮年部をつくったのだ」

3枚目 / 結成式 3月5日 / 「妙法の名将」たれ (2枚目の絵の裏に貼る)

1966年(昭和41年)3月5日、学会本部で行われた壮年部結成式の席上、その前途を祝して、池田先生が書き上げられたばかりの巻頭言が朗読されました。

そこでは、「妙法の名将」と題して、6つの指針が挙げられています。

第1に御本尊への絶対の確信。

第2に難事をも成し遂げゆく力。

第3に社会のすべてに通暁し、職場で勝利する世雄(立派な社会人)。

第4に後輩を育成していく熱意。

第5に人間性豊かな包容力ある指導者。

第6に旺盛な責任感と来るべき事態を予見し着実な手を打つ計画性

池田先生は結成式に出席された翌日には、南米・北米指導に旅立たれ、移動の機中から見えるアマゾン川に、壮年部結成への思いを馳せられました。

「窓を覗くと、地平線は明るみ、眼下には雄大なアマゾンの大河が見えた。この大河の如く、世界広宣流布の悠久の流れを開いてみせる そのための重大な“画竜点睛”こそ、壮年部の結成であったのだ」と。

4枚目 / 壮年の力 (3枚目の絵の裏に貼る)

日蓮大聖人のご在世当時も、中心となって活躍したのは、壮年信徒でした。

青年のイメージが強い四條金吾も、竜の口の法難、主君への折伏など、果敢に戦いぬいたのは40代半ばからと言われています。

また、富木常忍、大田兼明、曾谷教信などの門下も、今の壮年部に当たる世代の時に、必死に門下を励まし、大聖人をお守りしたのです。

池田先生は語られています。

「壮年たちが、今こそ立ち上がろうと、勇猛果敢に戦い、同志を励ましていったからこそ、大法難のなかでも確信の柱を得て、多くの人びとが、信仰を貫き通せたにちがいない。壮年がいれば、皆が安心する。壮年が立てば、皆が勇気を燃え上がらせる。壮年の存在は重い。その力はあまりにも大きい」

5枚目 / 青年の心意気で! (4枚目の絵の裏に貼る)

池田先生は、壮年部に対し次のようにご指導して下さいます。

「今、日本の国では青年が少なくなってきている。「壮年部」即「青年部」それぐらいの心意気で進むことだ。この点を先取りし、若々しい気概に燃える人は、勝っていける。団体も、国も、青年の心で勝利していける。」と。

また、「大事なものは「今」である。壮年が立ち上がるのだ。広布のため、同志のために、たとえ自分はどうなっても、「この私の姿を見てくれ!」という戦いを、青年の胸に残していくのである。」ともスピーチして下さいました。

私たちも池田先生の弟子として、四者一体となって、青年の心意気で師匠にお応えして参りましょう。

決意など